

れわれのインドにご招待したい」という申し入れがあったというのです。

ところで、イタリアに行く前に、ご一緒された孔子夫人は靈界物語の第三十九巻を拝読されて行かれたそうです。帰ってから第四〇巻を拝読されたのですが、それがなんとピッタリのところだったと驚いて話されているのです。『靈界物語』もそう感じたときが一番大事だと思ふのです。というのは、第三十九巻というのは、われわれが主の大神さまとして称え祭る神素盞鳴大神が自ら主宰神として表に立たれ宣伝使たちを教育され、その宣伝使たちを世界に派遣された場所、つまりフサの国の斎苑の館の問題を明示されている箇所です。

第十六巻から第三十三巻までは、錦の宮々といつて、これは綾部の問題で主宰神は国祖ですね。ところが聖師さまが、本当の救いを示されるのが第二十九巻の、斎苑の館々からなのです。そうしますと、その三十九巻からは何が書かれているかと申しますと、インドの国のこと。インドは何が問題かという、厳しい階級制度の問題。太古は三階級だったが、それが四種の差別になってその一つ一つを詳しく述べておられます。

第一を刹帝利といつて、これは代々王となるべき家柄。  
第二を婆羅門といつて浄行、国柄相当に学問をして代々家を伝えるもの。

第三を毘舍といつて、これは商人。

第四を首陀といつて、これは農業を営むもの、つまり百姓です。こうした人間を差別する悪弊から解放させんがためにお釈迦さんが出て仏教を開いたのですが、つまり一切平等を説いたのですが、そのせつかくの神髓は法滅に響いているありさまですね。お釈迦さまは神素盞鳴大神さまの四魂の一人で、しかもその中心たる和魂でした。その本来のお釈迦さまの教えも今やオシヤカになろうとしているわけです。この三十九巻は、その最大の悪の張本たる「大黒主」を言向和すべく宣伝使隊を派遣される模様が示されている巻なのです。そのオシヤカに崩れ欠けているインドの国からの和明先生へのご招待なのです。やっばりこれは、聖師さまが動かされているのだなと、しみじみ思わされているところなのです。ですから、『靈界物語』というのは大正時代に口述されたもので、今のわれわれには無縁のもの……かの如くに思う方もあるかも知れませんが、実際には一つ一つ、これからの世界、動かして行く社会情勢のこと、一切を真実お示しになっていることが伺われるのです。その意味でも、あらためて『靈界物語』三十九巻からの拝読をお勧めしたいと思うわけでございます。

本日は聖師さまのお生まれになったためたい瑞生大祭でございます。ありがとうございます。

# 記念講話 (海外宣教報告)

## ローマからハルナの都へ

### 出口和明

去る七月十六日成田を出発してイタリアへ直行、七月二十七日に帰国しました。平成元年（一九八九）にイタリアとの交流が始ってちょうど十年目。私が初めて訪伊した時、世界は激しく動いていました。天安門事件の直後だったから、イタリア政府の警戒もきびしかった。ベルリンの壁はくずれ始め、ソ連邦は破壊するという、世界歴史の変わり目だったのです。ゲスト講師としてイタリアのサマーキャンプに招かれ、聖師の教えを外国に伝えることができました。まことの神の實在と、人は罪

の子にあらず、誰もが神の子であるということ、人としての尊い使命を説きました。イタリアはカソリックの国だから、受講者のシヨックは大きかったと思います。

その時、イタリア沖道ヨガの主宰者である八尋雄二氏と語り合い、誓い合ったのです。世界に聖師さまの教えを広めようと。帰国にあたって、ローマ空港で、私ははいていた下駄をぬいで八尋氏に渡しました。「あなたに下駄を預けるよ」と彼は深くうなずきました。

平成元年、二年とサマーキャンプに招かれ、平成三年から一

年おきに国際交流会が始りました。第一回国際交流会では、愛善苑から四十四名が訪伊し、ローマで歌祭を執行しました。その時、八尋氏は私の預けた下駄を履いてきました。「約束した通りやったでしょ」ということです。今回また履いてきた。「下駄がちびたらもつたないので、よほどの時しか履かないんだ」  
彼がそういつてくれるだけの成果があったと思います。平成三年から五年、七年、九年、十一年と、国際交流会はこれで五回目。イタリアの土をふむのは七回目でした。

実は私は昨年の暮れに母を失いまして、それを悲しんでいる暇もないほど執筆に追われて、過労が重なり、健康に自信がもてなかった。今回はお断りしようと思ひ、沖道ヨガのメンバーで北海道在住の西村さんを通じて、その旨をイタリアへ申し入れました。すると八尋さんから国際電話が入り、「もし十和田先生が来れなかったら、愛善苑から誰か役員を派遣してほしい。そうでなかったら、十年間続いた交流のパイプが細くなりそうなのがする」というのです。そこで事務局にどなたか行ってもらうように申し入れたのですが、なかなか見つからない。結局は私が行かざるをえないかなと決断しました。決断したら不思議なものでもグングン食欲が出てきました。これで行けると。神様というの、させようとしたらどうにでも思い通りの方に向けさせられるんですね。結局愛善苑からは、私と家内と二人きりで行くことになりました。

非常に心強かったのは、愛善苑会員である千葉の目崎真弓さんと東京の霊界物語研修会の松田明氏がローマからの案内で個人的に参加され、現地で合流できたことです。二人とも英語ができるものですから、彼らの通訳で外人が話しかけてくる。そういう意味でいままでもよりもよりひだの細かな交流が出来たと思います。

今回の国際交流会はミラノ郊外八十万平方メートルという広い別荘地で行なわれました。参加者五百名弱、コソボ紛争前後からの各地難民の救援活動などを通して新たにアルバニア、モロッコ、カンボジア、ウクライナ、中近東などからの参加もあった。今回の国際交流会の総合テーマは「感謝心と奉仕行」。私に与えられた講題は「菩薩道」でした。菩薩といえはみろくさま。事務局の山口さんから原寸大のみろく神心像をおみやげにと預って行きましたが、会場正面にそれがかがげられ、交流会全体がみろくさまに導かれているような心強い思いでした。

奉仕行とは愛行ともいいます。単に奉仕ではなく相手を愛し包みこんでいく。これが根本的なテーマです。今まで国際交流会では、ドクター・タチアと私が精神面での指導者でしたが、ヨガの会員にとっては理解に苦しむ人もあったでしょうね。タチアは世界的に高名な哲学博士で、ケンブリッジ初め英、米、日本などの各大学の教授であり、宗教哲学大辞典の編纂にもかかわる学者です。沖先生の愛弟子でもあり、彼らにとって、いわ

ば私は異教徒です。どちらの講座をとるかとしたら、やはりタチアを選ぶことになりましたよね。

タチアに関しては最初から火花を散らし合うことになりました。ある晩、ペサロの八尋夫人のお母さんの家へタチア夫妻と私とスタッフの人たちが招かれました。ところが何のことからか八尋さんとタチアが激論をかわし合って、朝まで続いた。英語でのやりとりなので、私と家内には分からない。途中で休ましてもらいました。

翌年、八尋氏から、その時の激論の内容を教えてくださいました。「十和田の話は、邪教だ。沖先生の立派な教えがあるのに、なぜ異教徒の十和田を呼んで来てみなを迷わすのか」そういうことだったらいいんです。タチアは敬虔なジャイナ教徒です。インドでヒンズー教の弊害を身をもって知っているだけに、神や霊界を説く私を恐れたのでしよう。向うは徹底的な小乗の教、聖師さまの教は大乗の教ですね。受講者はさぞ判断に迷ったでしょうね。

ところが八尋さんは思い切った事をやりました。第一回の交流会の最後の時に全員集めて、私とタチアを演壇に並ばせて、一つの質問をそれぞれに答えさせたのです。この違いは明らかでした。

終ってからタチアがトイレに行き、クマリ夫人が外で待つていられた。私が通りかかると、夫人が私をつかまえて、「うちの

主人の話よりも、ずっとあなたのお話の方が良かった」と。びつくりしましたね。するとタチアがトイレから出てきて、私を抱きしめて「私は学者だから頭でしゃべっている、あなたはハートでしゃべっている」

言う事は別でも、それから心が触れ合うようになりました。

一昨年の第四回の国際交流会の時、四大主義を説いたのでした。人生いろんな苦しい事がある、その上にみんな重い荷物を背負って生きている。取り越し苦労、過ぎ越し苦労、この荷物をみんな捨ててごらん。人間の自由にできるのは、たった今、このせつなしかないのですから。と言い、惟神の心を説きました。聞いていたタチアやドクター・ガンジーら数人のインド人が終わったあと、私を囲んで、タチアが言いました。「私はいままでずっと重い荷物を背負ってここまで来た。今のあなたの話でやっとそれらの荷物を降ろす事が出来るようになった。来年必ず愛善苑を訪ねて、王仁三郎先生の話をもっと聞きたい」と。

昨年、私は心待ちにしていたが、実はガンが悪化していて、今年の四月に昇天されていた。ですから、今回はタチアの姿が見えず、とても残念でした。だが今までどの大きな違いは、心の問題の講義が私一人にしばらくられた。だから参加者全員が聖師さまの教えを聞くことになる。聞く人も矛盾なく聞くことが出来た。

八尋氏は非常に今回の交流会を喜びました。スタッフの人が「今度の交流会は十点満点なら何点でしょう」の質問に、八尋氏

は「今まではせいぜい三点、今回は七・五点はやれるな」と。国際交流会の目的は、参加したひと一人一人が交流して心をつないでいくということにある。ところが今までいくつものグループが参加したが、みな自分のグループだけで固まってしまっただけで交流しない、自分達の出番が来るとやるけれど、それが終るとすぐに観光に行ったりして、人と人との交流ができなかった。その意味で、やつと十年にして及第点というわけです。

最後の食事会のあと、オランダのハンスという人が緊張した面持で私を待っていました。彼は昨年来日して愛善苑に泊まりましたが、滞在中、お寺まわりなどで忙がしく私と語ることはなかったのです。ハンスが言うのには、「十和田先生が、こんなすばらしい話をされていたとは知らなかった。今から言えば、私は大変失礼でした」と何度も謝るんです。

さらにまたインドの人達が何人も来ていましたが、その中の四人（三人の女性はジャイナ教）が代表して私のところへ来て「ぜひインドで教えを説いてほしい」というのです。『靈界物語』では、宣伝使の最終目的は月の国（インド）のハルナ（ボンベ）の都へバラモンの大黒主を言向け和すことでした。私は来年一月に行きますと約束しましたが、物語でいうと、三十九巻、四十巻のあたりまで来たのかと思う。荒魂の勇みをふりおこし、どうか希望を持って、皆様とともに内外宣教の一步を大きく踏み進んでいただきたいと思います。